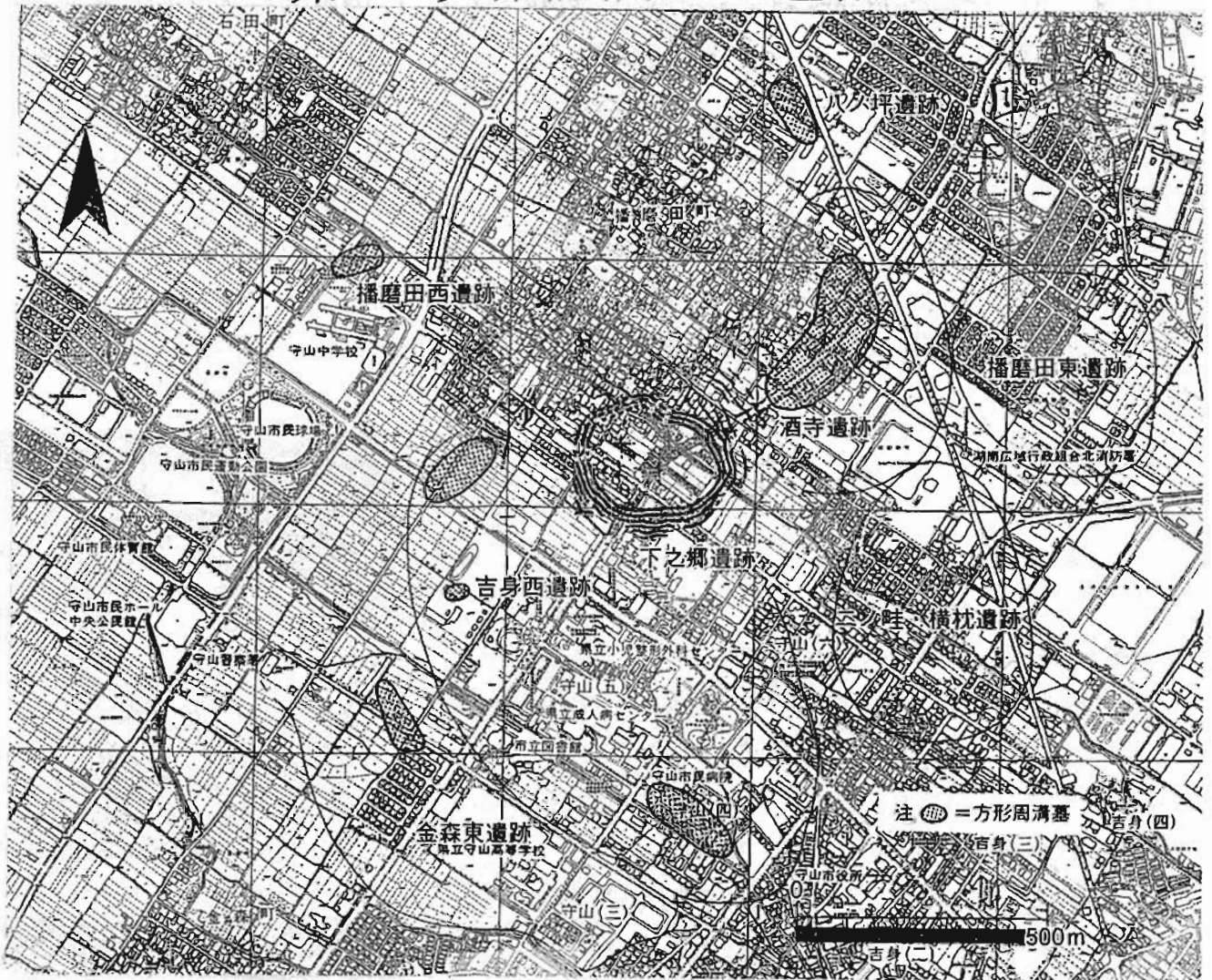


下之郷遺跡発掘調査

現地説明会資料

== 第97次確認調査の速報 ==



周辺遺跡地図（下之郷遺跡の環濠と墓の位置）

平成26年11月8日
守山市教育委員会

遺跡名	: 下之郷遺跡（しものごういせき）第97次調査
調査地	: 守山市下之郷二丁目字井上629-2,3番地
調査面積	: 約200㎡
調査期間	: 平成26年7月25日から平成26年11月中旬まで（予定）
調査目的	: 重要遺跡範囲確認調査

1 はじめに

下之郷遺跡は野洲川下流域平野の中央部の扇状地末端部分に位置しています。これまでに97次の発掘調査が進められ集落の様子が徐々に明らかになってきています。これまでの調査を振り返ると、1983年に行われた道路建設に伴う調査で大溝3条が発見されたことで、この遺跡が弥生時代中期後葉（約2200年前）の環濠集落であることがわかりました。その後、遺跡範囲の内外で調査が繰り返され、環濠の周回範囲がわかるようになりました。1996年には集落北西部で堅固な柵や門柱が築かれた出入口が発見され、1998年には集落北東側に8～9条もの大溝が掘られていることがわかりました。また、2000年に実施した調査（42次）では、これまで集落の西端と考えられていた場所のさらに約100m西側で井戸や建物跡が発見され、集落西側では3条の環濠のさらに外側にも居住域が広がっていることが推定されるようになり、遺跡の全体規模は東西約670m、南北約460mで面積はおよそ25㍍にもおよぶことがわかりました。

2 環濠集落内部の調査

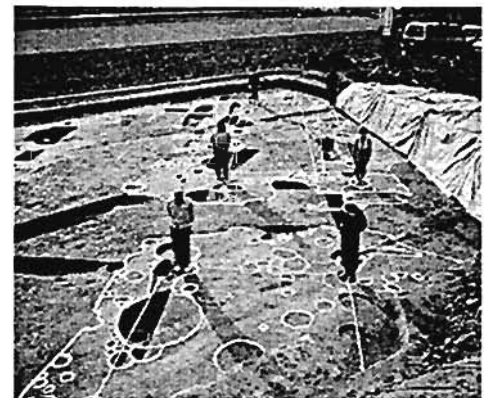
下之郷遺跡が弥生時代の環濠集落と認識された当初は、集落内部の様子は、あまりよくわかっていませんでした。しかし、平成10年度から着手した道路建設工事に伴う発掘調査や史跡化に向けての重要遺跡確認調査では、建物跡や井戸跡などが密集する状態で検出され、環濠内部の建物構成が注目されるようになりました。なかでも集落中央部で見つかった南北に延びる区画溝（27次）は集落の中核施設を取り囲む方形区画の一種と考えられ、その後の調査の重要課題となっています。

44次調査（H13）では、集落の中央やや北西から床面積が55㎡を超える独立棟持柱付大型建物が発見されるとともに東西に伸びる区画溝が確認されました。その時点での大型建物の集落内での評価は「首長が儀式やまつりをおこなう場所」「集会所」「ムラ全体の共同倉庫」などの意見が出され、集落（方形区画内）の中核施設ではないかと指摘されました。

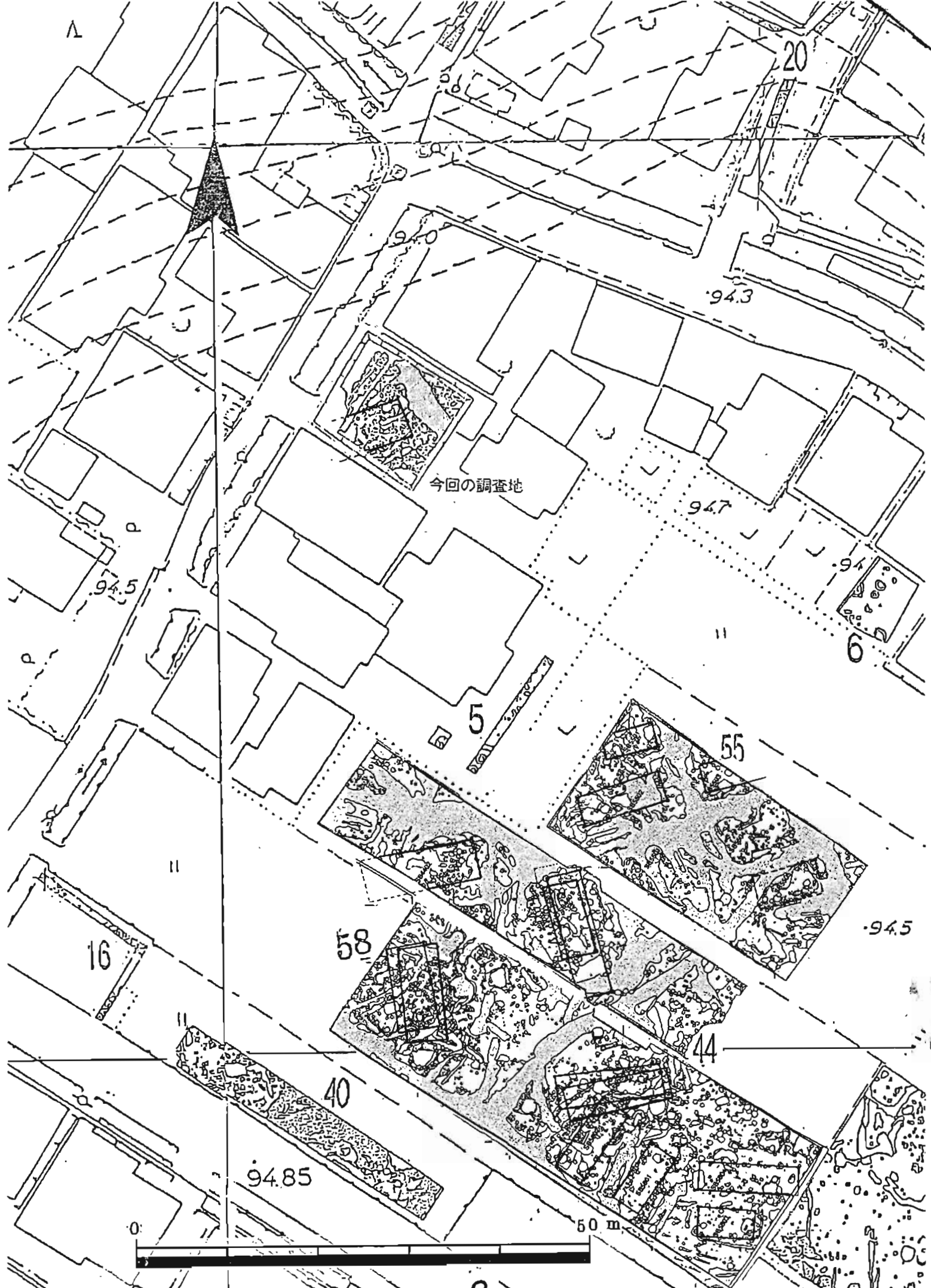
その後、55次や58次調査では掘立柱建物や壁立式建物が10棟以上検出され、集落内部の建物種類や構成は非常に複雑で、時間経過とともに変容していく様が窺えるようになってきています。



▲中央部調査（44次）大型建物



▲中央部調査（55次）建物群



今回の調査地

94.85

50 m

3

下之郷遺跡 97 次発掘調査
検出遺構

① 掘立柱建物の可能性
がある遺構 SB-1

- 梁間 5.2m
- 桁行 5.0m 以上
- 柱径 約 20 cm
- 柱穴 深さ 40~60 cm
- 時期 弥生時代中期後葉
- その他 建物の両側に区画溝を配置する。

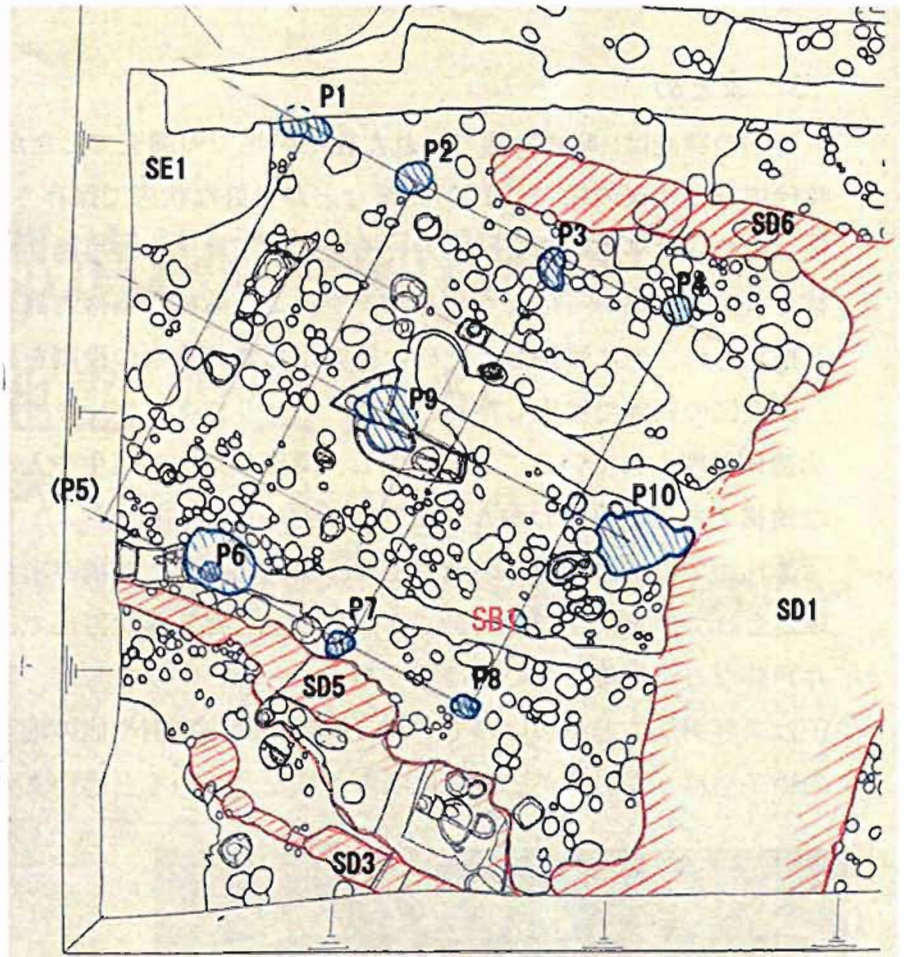


図3 検出遺構平面図

② 壁立式平地建物の可能性
がある遺構 SB-2

- 直径 約 5 m
- 平面形 円形
- 構造 中央に焼土城
両側に 2 本主柱
周囲に側柱を配置
- 時期 弥生時代中期後葉

(その他の遺構)

・溝跡 (弥生中期後葉)

- SD1 幅約 3 m、深さ約 1 m
- SD2 幅約 50 cm、深さ (未調査)
- SD3 幅約 40 cm、深さ約 20cm
- SD4 幅約 30 cm、深さ約 40 cm
- SD5 幅約 50m、深さ約 30 cm
- SD6 幅約 80 cm、深さ (未調査)

- ・井戸跡 (弥生中期後葉と推定される)
直径約 2 m、円形、深さ約 1.9m 程度。
(ボーリングステッキによる計測)

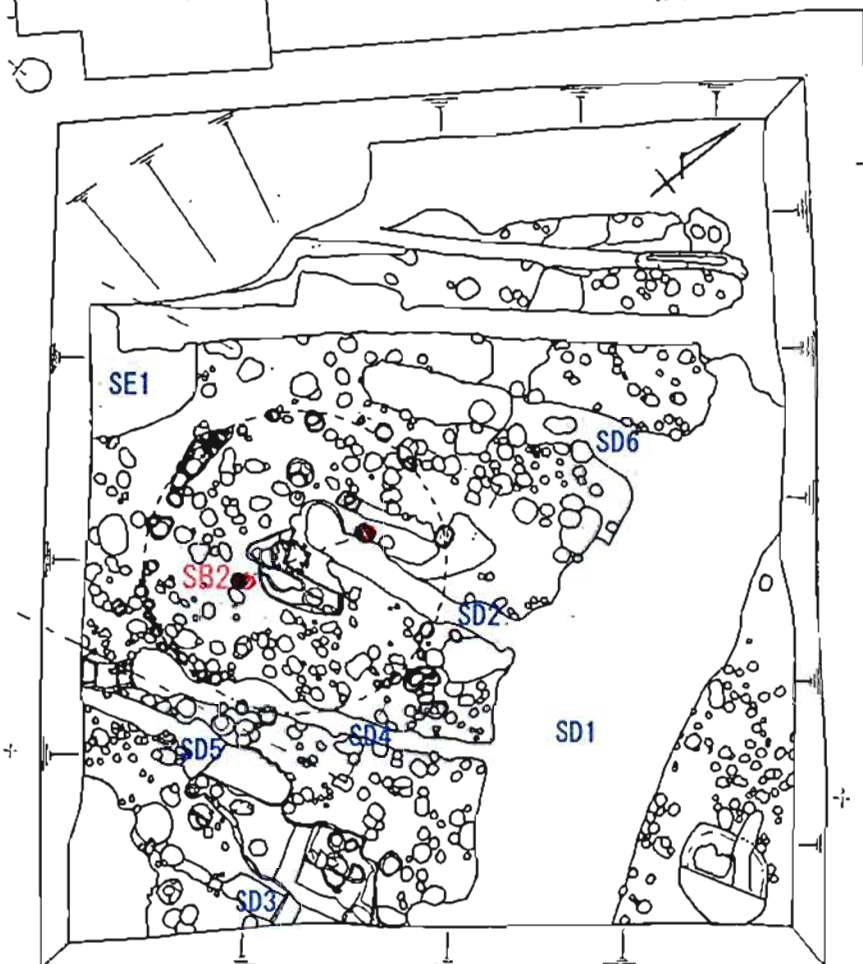


図4 調査全体図

3 まとめ

今回の調査は、昭和に建てられた住宅跡地での調査でしたが、地下約 70 cm 程度の場所に弥生時代中期後半代の柱穴、溝、井戸跡などが良好な状態で保存されていました。検出した柱穴は、独立棟持柱付平地建物（か柵列）や壁立式平地建物の可能性が高く、同じ場所で数時期の建て替え（重複）があったと考えられます。また溝は、集落内部の居住域や建物群を区画するものと推定され、溝に堆積した土砂の観察から集落排水の役割を持っていたと推定されます。

調査区の西隅で検出した井戸跡は、ボーリングステッキで調査した結果、下層には多量の植物遺体が埋もれていることが判明し、環濠集落内の植生や人々の生活の様子を知るうえで貴重な遺構であることがわかりました。

これまでの下之郷遺跡の調査では、環濠の近くで遺構が密集して広がっている場所はあまり確認されていませんでしたが、今回調査をした集落北西部では、環濠の近傍まで建物跡や溝、井戸跡などが密集している地域であることがわかりました。弥生時代中期の環濠集落内部の様子は未解明なことが多いのですが、周辺の調査事例や他の地点と比較していけば、当時の集落の様子や移り変わりが、さらに明らかになっていくと思います。



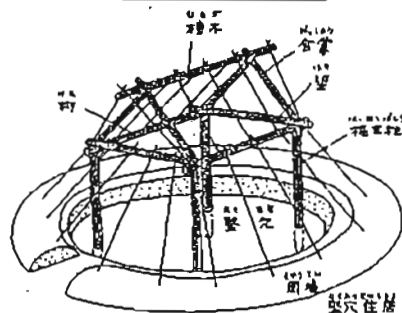
今回検出した遺構 (SB 1)



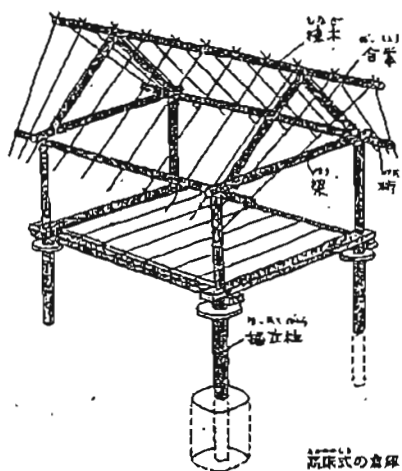
97 次調査全景

遺構・用語解説図

① 竪六式住居



② 高床式建物



③ 平地式建物

